

主婦の健診受診状況調査

～糖尿病へまっしぐら?! 現実逃避派の「ポッチャリ主婦」～

糖尿病診断アクセス革命事務局(代表:矢作直也・筑波大学大学院人間総合科学研究科内分泌代謝・糖尿病内科准教授)は、30代～60代の主婦300人を対象に調査を実施しました。

潜在患者も含めたわが国の糖尿病人口は1000万人を超えるといわれ、特に健診受診率の低い主婦層の糖尿病発症、さらに合併症の進行とこれに伴う国民医療費への圧迫が懸念されています。

本調査は、その主婦層の健診受診状況、家族や自分の健康への意識、糖尿病の理解の基礎をなすインスリンの理解やイメージなどを把握するために行ったものです。特にハイリスクグループとして、糖尿病家系に加え、BMI25以上の「ポッチャリ主婦」に注目しました。

調査結果の主なトピックは以下の通りです。

健診を1年以上受けていない主婦は、半数以上(55%)。30代主婦では8割(80%)と高い。

「自分より家族の健康を気づかいがち」な主婦が8割(80%)。その一方、3人に2人(66%)が「本当は自分の健康が心配」。

自分の健康で心配なことは、女性特有の病気(乳がん、子宮がんなど)が7割(71%)。血糖値への意識は、30代主婦でわずか1割強(13.3%)と低い。

糖尿病の理解の基礎となるインスリンへの理解は低く、インスリンが「すい臓」から分泌されるホルモンだと知らない主婦が半数近く(47%)。

家族(血縁)に糖尿病患者がいる主婦は3割(31%)。このうち、1年以内に健診を受けていたのは4割弱(39%)で、3割強(31%)が「将来、自分が糖尿病になるとは思わない」と回答。

ポッチャリ主婦は3人に1人(32%)が健診を5年以上受けていない。8割以上(84%)が「自分より家族の健康を気づかいがち」な一方、「本当は自分の健康が心配」も8割強(81%)。半数強(51%)が血糖値を心配し、8割以上(84%)が将来、糖尿病になるかもしれないと不安。

最寄りのドラッグストア・薬局で血糖値の推移が簡単に測定できるなら、利用したい主婦は半数近く(46%)。

【調査概要】

調査方法:インターネット調査

調査対象:30代～60代の主婦(会社員・公務員を除く)300人

調査期間:2011年9月14日～15日

1) 健診受診状況

健診を1年以上受けていない(「いつ受けたかおぼえていない」を含む)主婦は、半数以上(55%)にのぼります。特に30代主婦では8割(80%)と、40代(48%)、50代(48%)、60代(43%)に比べ、極端に受診率が悪い状況が明らかになりました(図1)。

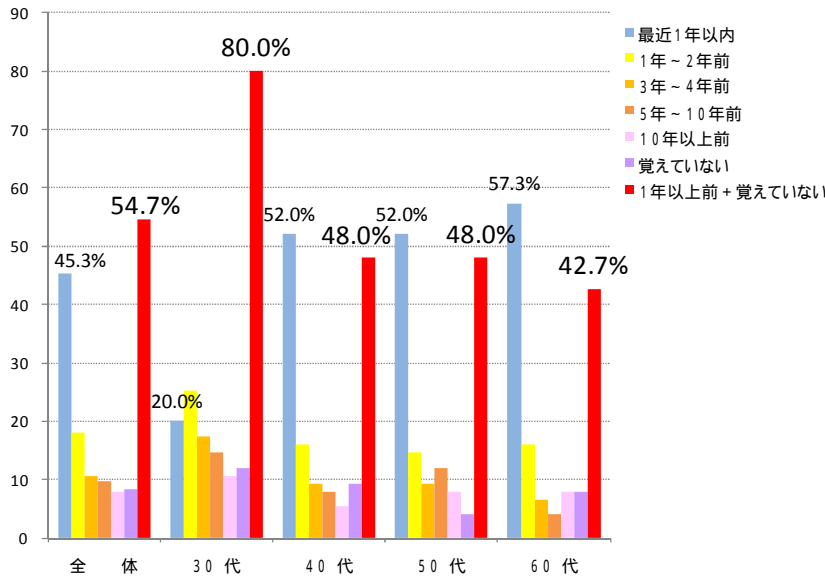


図1 健診受診状況(N=300)

2) 健診を受けない理由

健診を1年以上受けていない(「いつ受けたかおぼえていない」を含む)主婦に、健診を受けない理由を聞くと、「面倒」(81%)が第1位で、「病気がわかるのが怖い」(57%)が続きました。

5年以上受けていない(「いつ受けたかおぼえていない」を含む)主婦に限ってみると、「怖い」が68%と10ポイント以上上昇し、健診の煩わしさや時間のなさに加え、自分が病気だと知らされる怖さが、健診から足を遠のかせていることがわかりました(図2)。

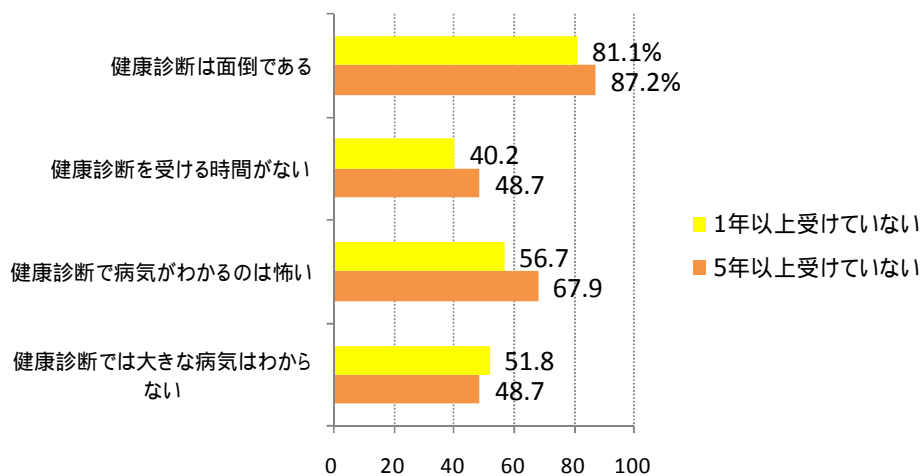


図2 健診を受けない理由

(健診を1年以上受けていない人(「いつ受けたかおぼえていない」を含む) N=164)

3) 家族と自分の健康についての意識

「自分より家族の健康を気づかいがち」な主婦が 8 割 (80%) にのぼる一方、3 人に 2 人 (66%) は、「本当は自分の健康が心配」と回答しています (図 3)。

「自分より家族の健康を気づかいがち」な意識は、30 代 (87%)、40 代 (89%) と子育て世代で特に高く出ています。30 代は健診受診率が極端に低い年代であり、40 代に比べても、自分の健康に気を配る余裕がない状況が読みとれます。

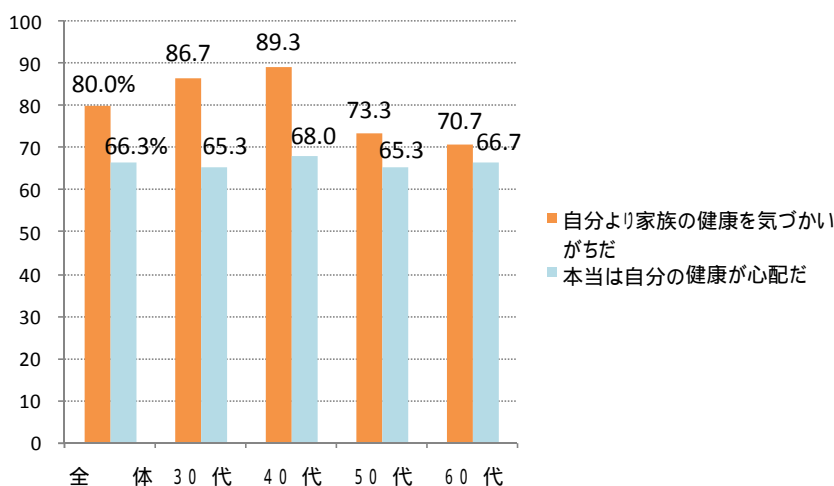


図 3 家族と自分の健康についての意識 (N=300)

4) 自分の健康で心配なこと

自分の健康について心配なことは、女性特有の病気 (乳がん、子宮がんなど) が 7 割 (71%)。血糖値 (27%) への意識は、コレステロール (45%) と比較しても低いことがわかりました。

特に 30 代主婦で血糖値を心配しているのはわずか 1 割強 (13%) にとどまり、血糖値への注意はきわめて低くなっています (図 4)。

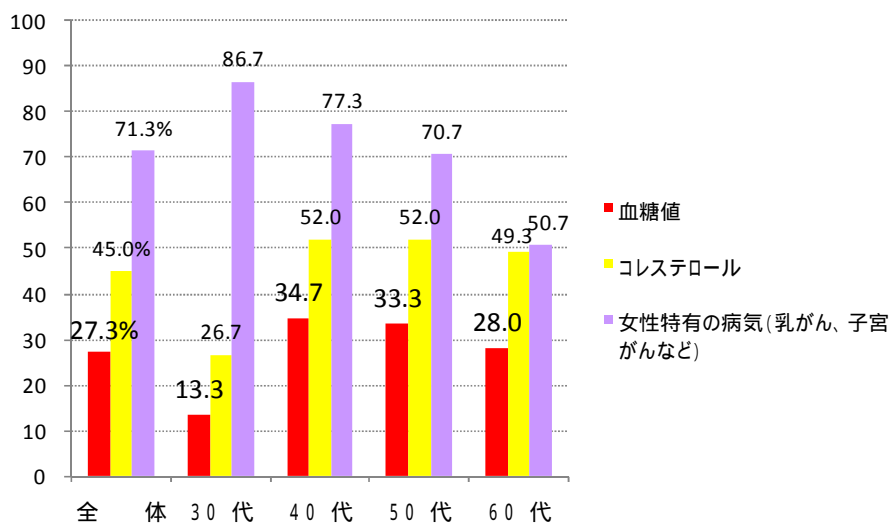


図 4 自分の健康で心配なこと (N=300)

5) インスリンに関する理解やイメージ

糖尿病の理解の基礎をなすインスリンへの理解を見てみると、インスリンが「すい臓」から分泌されるホルモンだと知らない主婦が半数近く(47%)存在し、30代主婦では6割近く(59%)にのぼっています。また、インスリンが「血糖値」を下げる働きをすることを知らない主婦は全体の2割強(21%)、30代主婦の3人に1人(33%)でした(図5)。

インスリン治療について、いまだに根強く存在する誤ったイメージを列記したところ、誤解の傾向には年代ごとに相違がみられ、30代では「一度始めたら一生続ける必要がある」(72%)、40代では「注射が痛そう」(53%)、60代では「糖尿病が悪化した際に行う最後の治療」(63%)が他の年代より高く出ています(図6)。

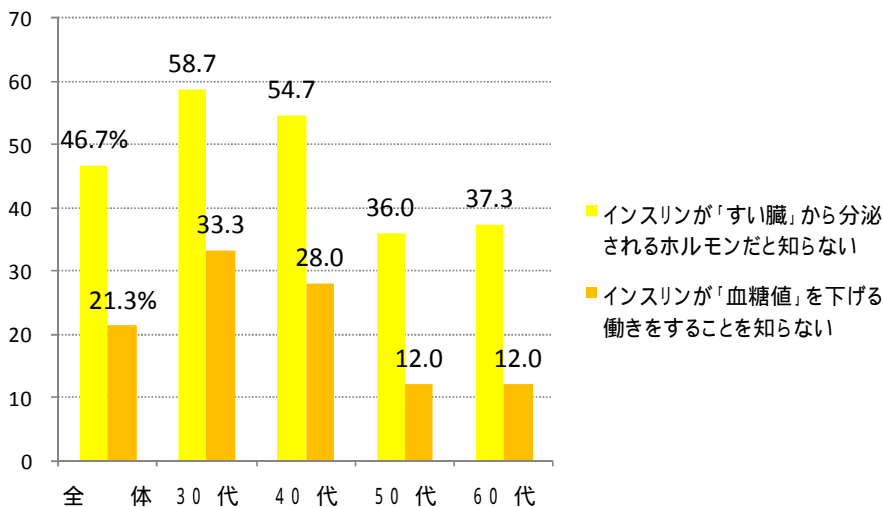


図5 インスリンについての理解(N=300)

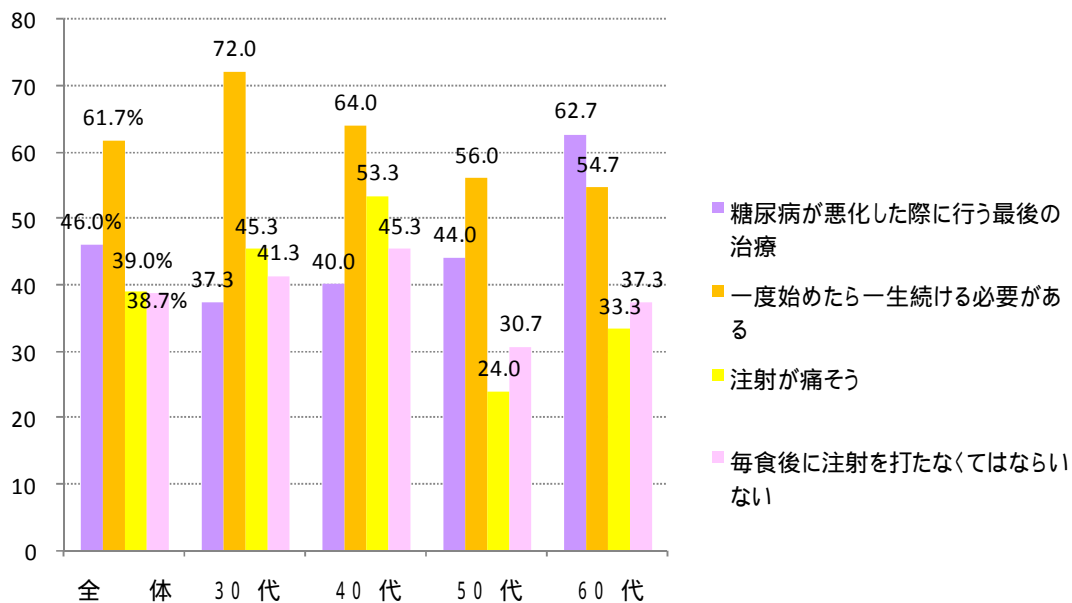


図6 インスリン治療のイメージ(N=300)

6) HbA1c 測定意向

最寄りのドラッグストア・薬局で血糖値の推移が簡単に測定できるなら、利用したい主婦は半数近く(46%)存在し、血液検査へのハードルを下げることの社会的意義が示されました(図7)。

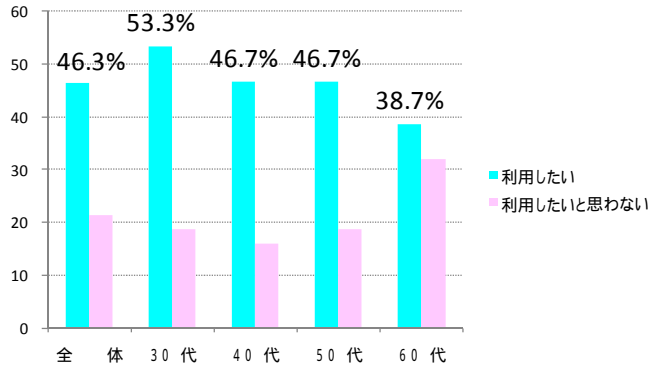


図7 HbA1c 測定意向(N=300)

7) 糖尿病家系への意識

家族(血縁)に糖尿病患者がいると答えた主婦は全体の3割(31%)で、このうち、1年以内に健診を受けていた人は4割弱(39%)にとどまりました(図8~9)。血縁に糖尿病患者がいれば、糖尿病の発症リスクは高まりますので、これは好ましくない結果といわざるをえません。

また、家族(血縁)に糖尿病患者がいる主婦の3割(31%)が「将来、自分が糖尿病になるとは思わない」と回答し(図10)、がんなどに比べ、糖尿病は他人事化しやすい疾患といえそうです。

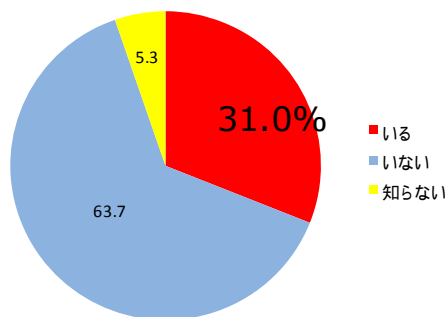


図8 家族(血縁)の糖尿病患者の有無 (N=300)

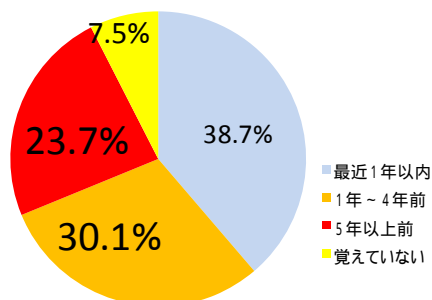


図9 健診受診状況 (家族(血縁)に糖尿病患者がいる人 N=93)

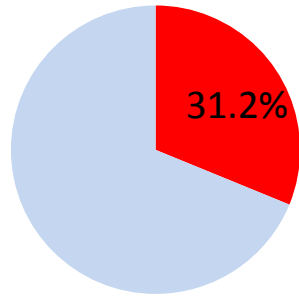


図 10

「将来、自分が糖尿病になると思わない」割合
(家族(血縁)に糖尿病患者がいる人 N=93)

8) 「ポッチャリ主婦」のプロファイル

日本人は体質的に糖尿病になりやすく、糖尿病家系とともに、肥満などにも注意が必要です。

BMI25以上の肥満者(以下、「ポッチャリ主婦」)の健診受診状況は、BMI25未満の非肥満者に比べ悪く、5年以上受けていない(「いつ受けたかおぼえていない」を含む)主婦が3人に1人(32%)にのぼります(図 11)。

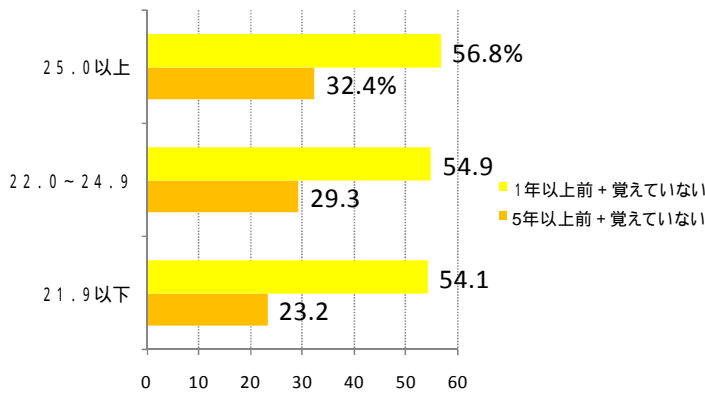


図 11 BMI 別 健診受診状況(N=300)

そこで、ポッチャリ主婦のプロファイルを見てみると、「自分より家族の健康を気づかいがち」な人が8割を超え(84%)、また同時に、「本当は自分の健康が心配」な人も8割強(81%)と高く出ています(図 12)。

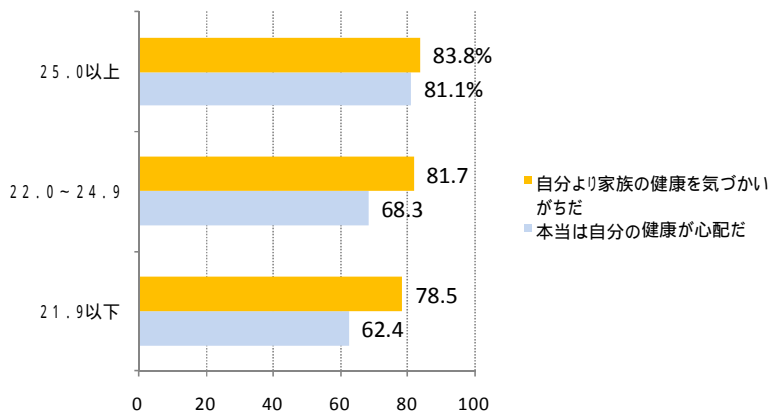


図 12 BMI 別 家族と自分の健康についての意識 (N=300)

自分の健康については、半数強(51%)が血糖値を心配しており、8割以上(84%)が将来、糖尿病になるかもしれないと不安を感じています(図13~14)。

また、糖尿病の理解の基礎をなすインスリンについての理解も、BMI25未満に比べて高く(図15)、ポッチャリ主婦は糖尿病への不安を抱きながらも、健診を受診できていない状況にあることがわかりました。

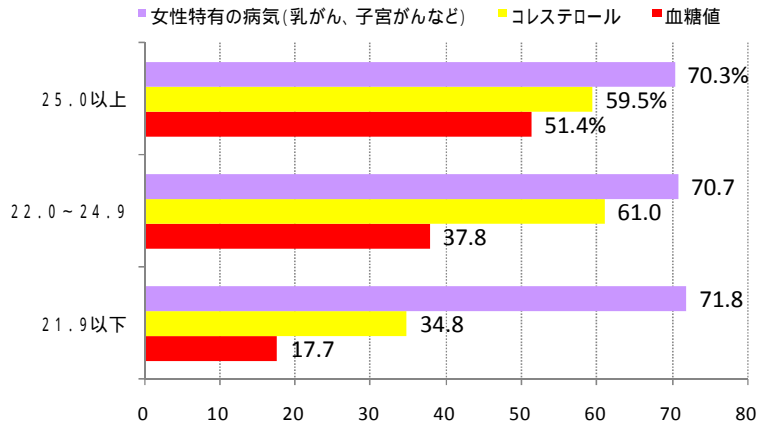


図13 BMI別自分の健康で心配なこと(N=300)

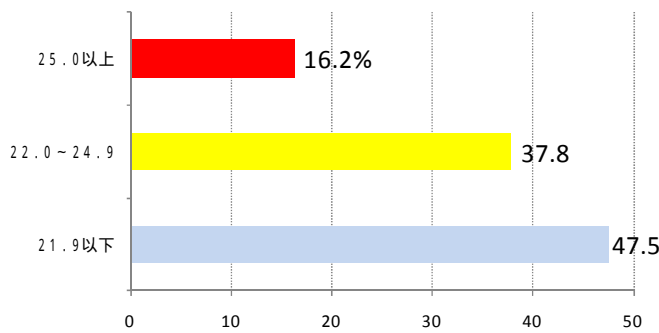


図14 BMI別「将来、自分が糖尿病になるとは思わない」割合(N=300)

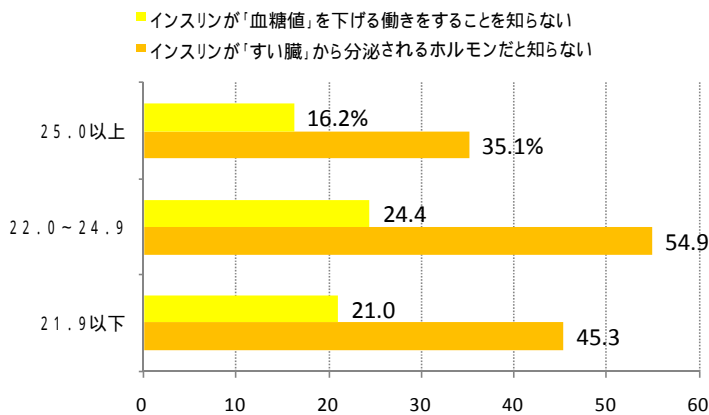


図15 BMI別インスリンについての理解(N=300)

ポッチャリ主婦の健診に対する意識を見ると、「面倒」(76%)、「病気がわかるのが怖い」(60%)が高い傾向にあります(図16)。

恐怖はしばしば理解の不足から生じますが、ポッチャリ主婦の場合、糖尿病への理解は比較的しっかりしています。推測されるのは糖尿病と診断された後の治療に対する理解の不足です。

実際、ポッチャリ主婦にはインスリン治療への誤解が多く、特に「一度始めたら一生続ける必要がある」は8割近く(78%)と突出して高く出ています(図17)。

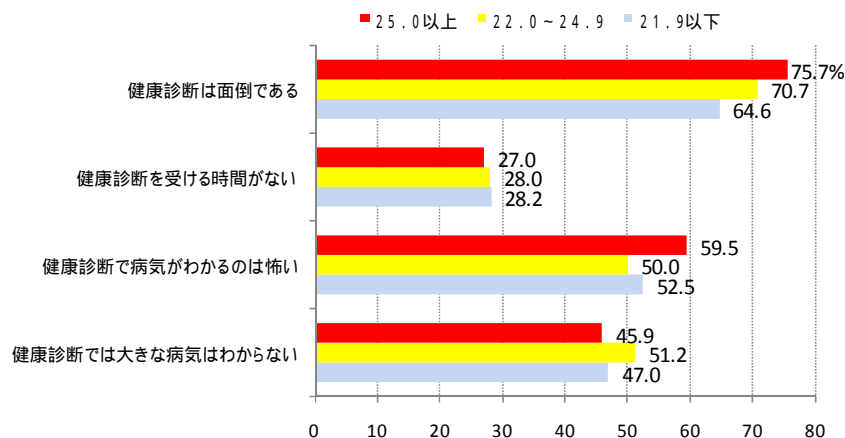


図16 BMI別 健診に対する意識 (N=300)

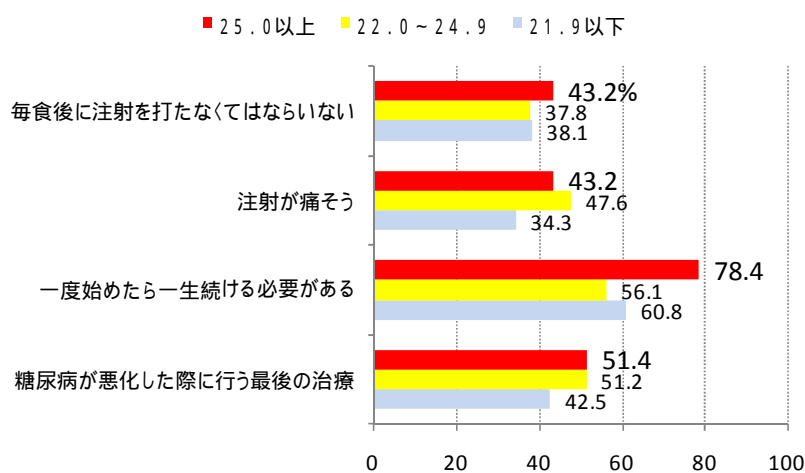


図17 BMI別 インスリン治療のイメージ (N=300)

今回の調査結果から思うこと

矢作 直也

糖尿病アクセス診断革命事務局代表/

筑波大学大学院人間総合科学研究科内分泌代謝・糖尿病内科准教授

健診を過去1年以上受けていない主婦が半数以上という結果は、特定健診の受診率の低迷からも予想される数字とは言え、改めて驚かされた。

特に糖尿病への注意は薄く、糖尿病家系的主婦でさえ、3割が自分は糖尿病にならないと信じており、糖尿病がいかにか他人事化しやすいかを再認識させられた。女性のライフサイクル上、30代の子育ての多忙さが糖尿病を他人事にしてしまう一因と考えられる。

その一方で、最寄りのドラッグストア・薬局で糖尿病のチェックが簡単にできるなら、利用したい主婦は半数近くもいる、という今回の調査結果には「我が意を得たり」の思いである。ドラッグストアや薬局など生活圏内の身近な場所でHbA1c(過去1~2ヵ月の血糖値の推移がわかる)を手軽に測定できる環境を整備すれば、忙しい主婦が糖尿病の診断にアクセスできる機会をまちがいなく増やすことができるだろう。

糖尿病家系とともに注目したポツチャリ主婦は、ひと昔前なら「肝っ玉母さん」と呼ばれたような、家族を支え、ひいては日本を支えている層である。このポツチャリ主婦は糖尿病の治療への恐怖心から、現実を逃避し、健診を避けている可能性が示された。しかし、本当に怖いのは、糖尿病と診断されることではなく、糖尿病の発症に気づかず放置することで進行する合併症である。

近年は1日1回ですむインスリン療法も登場し、治療のより早期の段階で使用するなど、病態に応じた多様な治療の選択肢が広がってきた。インスリンも含めて薬物療法への偏見を持たず、むしろ薬をうまく使いこなすことが早期診断とともに合併症の予防につながることも知っておいてほしい。

糖尿病診断アクセス革命について

糖尿病診断アクセス革命は、最新医療技術である「指先微量採血によるHbA1c測定」を用いて血液検査へのハードルを下げ、広く検査の機会を提供することで、未発見・未治療の糖尿病の患者さんや糖尿病予備群の方々をすくい上げ、最終的にはわが国の糖尿病を減らすことをめざす画期的なプロジェクトです。東京大学とNPO法人ADMSおよび足立区薬剤師会の共同研究プロジェクトとして2010年10月に足立区内の9薬局でスタートし、活動半径を徐々に広げています。

公式サイト: <http://a1c.umin.jp>

【本調査に関するお問い合わせ先】

糖尿病診断アクセス革命事務局

筑波大学大学院人間総合科学研究科内分泌代謝・糖尿病内科

〒305-8575 つくば市天王台 1-1-1

TEL 029-853-3053

代表者: 矢作 直也 (やはぎ・なおや)